
おりが選んだ十章からなる世界史

へげぞ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おりが選んだ十章からなる世界史

【Nコード】

N8580T

【作者名】

へげぞ

【あらすじ】

脱ヨーロッパ世界史観を築くために、作者が独自の判断で、世界史の十の場面を集めてつくりました。ギリシャもローマも重要だと思わないのででてきません。へげぞなりの世界史観をご覧ください。

1、シッダルタがヒンドゥー教開祖に会う

紀元前5世紀、インドでは農業が盛んになり、食べ物に困らなくなった。そこで、シッダルタは悟った。もう、働かなくても生きていける。

シッダルタは、釈迦族の王子だったが、十五歳で子をつくると、家出をしてしまった。自由を手に入れたシッダルタの求めたものは、真理の探究だった。

インドでは、哲学を考え、語り合うことが非常に盛んだったのである。それに参加した人々は、皆、悟った人たちである。つまり、働かなくても、農産物はインドに溢れていると。

インド人も気のいい人たちだったから、修行者たちに食事を与えることをいとわなかった。シッダルタは、真理を探究すべく、九年間苦行をして、のち、言い放った。

「苦行なんて、何の意味もねえ」

シッダルタは、そして、三十歳にして悟りを開いた。宇宙がどうできているかに、気づいたのである。それは、永遠など、決して存在せず、諸行無常であることである。

シッダルタは、そして、その教えを広めて歩いた。多くの人々が聞きに来了。これが成功したのも、当時のインドは豊かな国で、農産物が溢れており、働かなくても生きていけたからである。

シッダルタは、ヒンドゥーという男にあった。シッダルタはヒンドゥーに話しかけてみた。

「世界は永遠には続かない。必ず終わりが来るんだよ」
すると、ヒンドゥーは答えた。

「世界は滅んでも蘇るさ。何度でも」
シッダルタは驚いた。世界より広いものなど、想像したことがなかったからだ。

「きみは、世界が滅んだら、誰が蘇らせるといふんだね」

「シヴァさ。破壊神シヴァは、世界を滅ぼした後、次の宇宙をつくるだろう」

インドの人々はその会話を聞いて、シッダルタよりヒンドゥーを信じた。

シッダルタの教えは、インドの外へ広まり、東で大流行したけれど、インド人は、ヒンドゥーを信じている。

インドの西は知恵の遅れた人たちで、宇宙はひとつで、一人の神しかないと思いつけたのだそう。宇宙を何人もの創造神が創造するヒンドゥーでは、愚かな教えだ。

2、アレクサンドロス大王の遠征

紀元前356年、アレクサンドロス三世はマケドニアの王子として生まれた。紀元前338年、アレクサンドロス三世は、父の戦いに参戦した。初陣である。そこで、アレクサンドロスはおおいに敵を霍乱させ、戦い、勝利に貢献した。その戦いで、父、マケドニア王はギリシャの覇権を手にしたけれど、紀元前336年に暗殺されてしまう。

そして、二十歳にして、紀元前336年、アレクサンドロス大王は即位した。ギリシャの覇権をとり戻したアレクサンドロスは、二年後、西に遠征に出かける。

グラニコス川の戦いにおいて、アレクサンドロス率いる34000人の兵と、ペルシャ軍4万人の戦いだった。

この戦いにおいて、川をはさんで向かい合った両軍は、マケドニア軍の方から川を渡って突撃した。

アレクサンドロス大王も、突撃に参加し、みずから、敵将の一人ミトリダテスを投げ槍で打ち殺した。

「おい、王様が自分で敵将をやっつけたぞ」

「ああ、おれも見た。王様は自分で敵将をやっつけた。あの王様の勇気と実力は本物だ」

「負けてられねえ。おれも敵兵をやっつけてくるぞ」

「がんばれ。敵将といわずとも、雑兵の一人でもやっつけてやれ」

「おおとも。王様に、負けるなんて、おれはなんか悔しくて申し訳がねえ」

マケドニアの突撃で、ペルシャ軍の精鋭といえる騎兵が壊滅し、アレクサンドロスは大勝利した。

一年後、マケドニア軍は、ペルシャ王ダレイオス三世みずからが率いる十万の兵に遭遇する。アレクサンドロスが突撃の命令をくだすと、マケドニア軍の士気は高く、ペルシャ軍10万人を軽く蹴散

らした。

アレクサンドロスは進軍することをやめず、一年後、エジプトへ攻め込む。エジプト軍は、簡単に負け、エジプト人はアレクサンドロス大王を解放者として、好意的に向かい入れた。

エジプトを平定したアレクサンドロスは、紀元前331年、再び、ペルシャに攻め込み、何倍の兵を率いるペルシャ王ダレイオス三世の軍を蹴散らす。ペルシャ王国は滅亡した。

アレクサンドロスは中央アジア、インドまで攻め込んだ。軍を三分割して、残党を征圧したアレクサンドロスは、バビロニアに帰還した。

そして、

「最強の者が王を継承せよ」

と遺言して、病没してしまう。世襲を認めなかったアレクサンドロスの遺言により、大王国は分裂し、また、拡散した。

アレクサンドロス大王は生涯、負けなしであったと思われ、その遠征は、一人の有能な大將が勝ちつづけた時、どのくらいの領土を手に入れられるかを示している。

アレクサンドロス大王の領土が、一人の將軍の征服できる限界値なのだと思う。

3、燕雀いずくんぞ

紀元前221年、始皇帝が中華を統一し、諸制度を統一して、永遠につづくべき理想郷を築いた。始皇帝は、中華の皇帝に即位し、およそ考えられるすべてのことを、完璧につくりあげた。逆らうことのできるものはいなかったし、始皇帝はそれをなしとげるほどに優秀だった。始皇帝は、民間の武器所持を禁止した。これは、現代日本で大きな成果をあげている政策である。また、始皇帝は、度量衡を統一し、貨幣を統一し、車の幅を統一し、漢字の標準文字を定めた。理想郷がつくられたと、人々は思った。

そして、紀元前210年、始皇帝は病没した。

話は遡って、楚の農村に陳勝という若者がいた。彼は、農民のくせに天下国家を論じ、始皇帝の政治を褒め称えた。

聞いていた仲間が嫌気がさして、注意した。

「おい、陳勝。おまえ、ただの農民のくせにそんなこと考えても意味がないぞ」

陳勝はそれを聞いて嘆いた。

「燕雀いずくんぞ、鴻鵠の志しを知らんや」

ただの農夫である陳勝は、天下国家を研究して生きていた。

そして、始皇帝が死に、紀元前209年、陳勝たちに夫役の仕事が命じられた。この始皇帝によって統一された理想郷では、すべての仕事は計算通りにつくられていた。すべてを計算通りにつくると、これが始皇帝の残した遺産であった。

しかし、雨が降り、陳勝たちの隊は、荷物を運ぶのに遅刻してしまった。遅刻したら、死刑だ。計算通りにつくられた世界で、計算をくるわせれば死刑になるのだ。

仲間たちが悲しくて涙を流していた時、陳勝は呼びかけた。

「雨が降ったからって、死刑になる世界がどこにある。そんなことが許されていいわけがない。雨が降ることを計算していない政府が

悪いんだ。おとなしく死刑になることはない！ 攻め込むぞ、みんな」

一人の仲間がいった。

「だが、おれたちが原因で計算通りの世界を乱していいのだろうか。おとなしく死刑になるのが天下国家のためではないか」

陳勝はいった。

「おれたちは完全な世界ができたと聞かされてきた。だけでも、雨が降った。おれたちは悪気はないのに、遅刻した。悪気のない農夫が死刑になる世界は、理想郷なんかじゃない。計算通りの世界は理想郷じゃなかったんだ。理想郷ってのは、まちがいも許してくれる世界だとおれは思う」

そして、意を決した農夫たちは役人たちに反乱を起こした。

陳勝、役人より矛を奪い、立ち振る舞うこと、八十回、八十人の役人を斬り倒した。陳勝、その動きは、天の気脈に通じ、地の気脈を動かした。

反乱は成功した。後という、陳勝・呉広の乱である。陳勝は王になる、と反乱軍は宣伝した。陳勝の反乱軍は破竹の快進撃をして、いくつもの城を攻め落とした。

だが、呉広は、

「おれは逃げる」

といって、姿を隠そうとした。それで、逆に役人に捕まってしまった。呉広が殺されると、仲間は、

「おれたち農民は、お偉いさんには勝ち目がないんだ」

と嘆いた。陳勝は

「王侯将相いずくんぞ、種あらんや」

といった。紀元前208年、天帝、始皇帝の築いた理想郷が崩壊するのに驚いて、わけを聞いた。天帝の臣は、

「陳勝という異分子が原因です」

と答えた。天帝は怒り、陳勝の死を定めた。ここに、陳勝の死は決定した。

陳勝は、秦の正規軍との戦争で敗れて死んだ。

後、天帝が陳勝はどんな悪者だったのか調べてみると、

「陳勝の器は、始皇帝に並ぶかも」

と出た。天帝、陳勝の死を嘆いたが、すでに遅かった。

4、イエスとロンギヌス

西暦28年、ナザレのイエスは、ローマ帝国の警吏によって処刑されようとしていた。みずからを「ユダヤ人の王」「神の子」と称した罪である。

イエスは一日中、大きな十字架を背負って街を歩き、見せしめになり、罪人として、ゴルゴダの丘に引き立てられた。イエス自身が担いでいた十字架を地面に刺し、そこに警吏がイエスを磔にした。

処刑人ロンギヌスがイエスの息の根を止めるために槍をかまえていた。

それを、イエスの弟子たちは遠巻きに見ていた。多くの観衆がイエスの処刑を見ていた。イエスというテロリストの親玉がとうとう捕まり、処刑されるのだという。観衆は熱狂的にそれを見ていた。

イエスが処刑されるのを、正義が実行されることだとして、歓声を送って見ていた。

イエスはいった。

「わたしは今日、死ぬこととなったが、わたしに悪気はなかったのだ。わたしは本当に地上に樂園を築くつもりでいた」

ロンギヌスが答えた。

「残念だが、そう思っているのは、あんただけだ。あんたの弟子たちは、地上に樂園をつくるつもりがない。あんたの弟子たちは死後の世界、天上に樂園をつくるつもりだ」

「なんだと。そんなバカな。死んでしまっただけから樂園に行っただけの得があるというのだ。わたしは、大衆に、地上に生きながら樂園のように暮らせることを願っていた。それが伝わっていなかったのか」

「ああ、伝わっていない。あんたの弟子たちは、人々を幸せにするつもりなどない。あんたの弟子たちは、五穀豊穡を禁止し、農業を禁止し、地上を枯れさせ、狩猟を栄えさせ、死後の幸せのために現世の利益を奪うつもりだ」

「バカな。農業の何が悪いというのだ」

「あんたの弟子の教育が悪いんだよ。だが、安心しろ。あんたに与えられるものがある。とびきりのでかい褒美だ」

「何だ、それは」

「欧米だよ」

「欧米？　なんだ、それは？」

「ここは地中海の東南の地だが、地中海の北の土地はあんたの死後、あんたに跪く」

「なぜ、わかるのだ」

「おれには予知能力があるんだ」

「地中海の北の土地というが、南のが繁栄していて教育も進んでいるのではないか？」

「確かにそうだが、地中海の南はあんたには与えられない。あんたとは別の偉人が奪っていく」

「それで、欧米とは何なのだ？」

「白人の土地さ」

「あの臭い連中か」

「そうだ。あの臭い蛮族だ。やつらは、千六百年後、世界の支配者になる。そのやつらは、あんたを神の子として信じているんだ」

「それは本当か？　千六百年後の世界の支配者は、隣人を愛し、民族の垣根を越えて助け合っているのか」

「残念だが、それはない。千六百年後、あんたの信者は、隣人を奴隷にし、民族を激しく差別している」

「それがわたしの信者といえるだろうか」

「そこが問題なんだ。千六百年後の世界の支配者は、おれかあんたのどちらかに従う」

「どういうことだ？」

「おれとは、つまり、ローマ帝国のこと。あんたとは、つまり、キリスト教のこと」

「キリスト教とは何だ？」

「あんたの弟子がつくる宗教だ。勝負しよう。千六百年後を賭けて。おれ、ローマは、東西に分裂し、東ローマ帝国はオスマン帝国に滅ぼされ、西ローマ帝国はナポレオンに滅ぼされる」

「いいだろう。受けて立とう。もし、おまえに優しさがあれば、おまえは、磔にされたわたしにわざと負けるだろう。そうすれば、千六百年後の世界の支配者は、隣人を愛し、民族の垣根を越えて助け合う」

「よし、いくぞ」

プオーと笛が鳴った。

ロンギヌスが槍でイエスを刺した。イエスは死んだ。イエスの負けだった。

5、イスラーム帝国の拡大

西暦570年、ムハンマドはアラブ半島に生まれた。西暦610年、商人としてすごしていたムハンマドは、思い悩むうちに、天啓を得た。それは、唯一神アッラーのみが神であり、偶像を拝すべきであり、神の前で万民が平等であるというものだった。

ムハンマドは、この教えを布教し始めたところ、多神教を信じる政府に迫害され、引越しを余儀なくされた。がんばって抵抗運動をつづけたムハンマドは、少しずつ信者を増やし、ついに、メッカを攻め滅ぼした。メッカにあった数百体の偶像は、ムハンマド自信の手によって、叩き壊された。

ムハンマドは本気であった。神と、神のもとに万民が平等である教えを本気で考え実行していた。それは、単純にして、高性能に機能し、ムハンマドの率いる一万二千人の軍は、アラブ半島を統一した。

ムハンマドの死後、イスラーム帝国は、破竹の大進撃をすることとなる。ペルシャ帝国を滅ぼし、ローマ帝国から地中海南岸を奪い、東はイランから、西はイベリア半島までに及んだ。

この大進撃の理由を、わたしは世界史に詳しい人に聞いたところ、イスラームのが税金が安かったからだと言われた。イスラーム帝国では、真面目に万民の平等を目指した統治者ムハンマドの教えのとおり税金しかとらず、他の支配者に比べて、べらぼうに税金が安かったのである。ムハンマドは富貴になることなど、望んではいなかった。だから、イスラームでは、税金は非常に安い。

しかし、戦争に勝利したアラブ人は、戦利品で大贅沢ができたと思われる。ムハンマドの戦い方も、敵の男は皆殺し、女をすべて妻にするという、快楽主義を満たしたものだ。そのため、イスラーム帝国は勝ちつづける。信じられない大勝利である。だから、わたしが考えるに、イスラームの勝利者とは、戦利品による富貴だけ

を得たのであり、世界史的に見て、イスラームの統治者は質素だったのではないだろうか。

歴史に理想郷があったとしたら、それは、真面目堅物のムハンマドの教えを守る快樂主義者イスラームの帝国である。イスラームでは、万民は平等であり、古い慣習はすべて壊され、世界観は単純化され、大いに栄えた。

イスラーム帝国は、科学を発明したもっと真面目堅物な教えを信じるもっと快樂主義者のヨーロッパ人に征服されていくけれど、世界史に大帝国をつくる条件は、真面目堅物な教えを忠実に守る快樂主義の軍隊であろう。

今のイスラーム諸国は、欧米を憎むのではなく、イスラーム原理主義に走るのではなく、ムハンマドより真面目堅物となって、世の真理を探究し、快樂主義者の手下をつくって、進軍させるべきであろう。きっと、栄光をとりもどすだろう。

6、フレグ・ハンとクリルタイ

西暦1206年、テムジン（チンギス・ハーン）は、モンゴルを統一し、大集会クリルタイにおいて、大ハーンに即位して、チンギス・ハーンとなった。モンゴル帝国の初めである。以後、チンギス・ハーンの子どもオゴタイ・ハーンは、着実に領土を拡大していた。

チンギス・ハーンの子、トルイの息子として、1218年、フレグは生まれた。

1253年、35歳まで大領主として生きてきたフレグに、兄、モンケ・ハーンから征西軍総司令に任命され、イラン以西を征服するべく進軍した。

1256年、不気味な噂のたつ暗殺教団イスマイル派のニザール派を征服すると、次は、アッバース朝へ向けて進軍した。

当時、アッバース朝の首都バグダードこそが、世界の中心だった。フレグは、モンゴル帝国の司令官として、世界の中心に戦いを挑んだのである。

この時、フレグはモンゴル帝国の全軍のうちの十分の一の兵を率いていたとされ、モンゴル帝国最大の軍隊を率いていた。モンゴル軍に包囲されたバグダードは、一方的に蹂躪された。1258年、アッバース朝のカリフ・ムスタフィスィムは、モンゴル帝国に降伏を願い出たが、無視され、残虐に殺された。フレグはそのまま、連戦連勝し、大進撃した。

「ははははははっ、おれが世界の首都を攻め落としたぞ。おれこそが、世界の帝王だ」

フレグは笑った。

しかし、その時、予期せぬことが起こった。1259年、モンゴル帝国の大ハーン・モンケが死んだのである。次の大ハーンを決める大集会クリルタイが開かれる。

フレグは世界の中心にいる。しかし、モンゴル帝国の中心はあく

までもモンゴル高原の大テントだった。

フレグは、功績からしたら、大ハーンになれてもおかしくはなかった。

「ははははっ、我らがモンゴル帝国は広すぎて、故郷に帰ることもできんわい。おれは、おれの領土で好きにやるぞ」

「クリルタイにはでないのですか」

配下が聞いた。

「大ハーンの位はくれてやる。だが、おれには世界の中心がある」
フレグ・ハーンは、1260年、イルハン朝を始める。1264年、後継者争いに勝ったクビライが大ハーンになると、フレグはそれを支持した。

十人以上の妻をもったフレグは、14人の息子と7人の娘をつくり、快進撃であった。

話は前後するが、1260年、フレグは部下にシリアのマムルーク朝を攻撃させた。マムルーク朝は当時、ヨーロッパから十字軍の攻撃にさらされており、それと果敢に戦っていた。カリフを世襲せず、有力者がカリフとなっていくマムルーク朝は、フレグの部下キト・ブカ率いるモンゴル軍を撃退した。ここに、フレグの快進撃は終わった。

これをもって、当時世界最強は、マムルーク朝であるとする。

7、スレイマン一世の第一次ウィーン包囲

1494年、スレイマン一世はオスマン帝国で生まれた。元気な男の子で、二十九歳の父親セリム一世も、我が子の誕生を喜んだ。スレイマン一世は、父が兄弟たちを次々と殺すのを見ていた。また、かつてモンゴル帝国の侵攻を撃退し、世界最強といわれたエジプトの 맘ルーク朝を父セリム一世が征服するのを見ていた。スレイマン一世は、血気盛んな武人として育った。

スレイマン一世が生まれた1494年、ヨーロッパでは大航海時代が始まっていた。1494年に、スペインとポルトガルは世界を二分割して統治する条約（トリデシリヤス条約）を結んでおり、スペインとポルトガルは世界を征服できるつもりでいた。

1519年、スペインを出港したマゼラン艦隊は、1522年、船長ファン・セルバステイアン・エルカーノに率いられ、トニリダート号は、世界を一周してスペインに帰還した。人類史上初の世界一周であり、大地が丸い地球であることが確認された偉業であった。スレイマン一世も、それに驚愕していた。大地が丸いなど、信じられない。しかし、スレイマン一世を激怒させたのは、スペインが世界を征服しようとしていることである。

1520年、スレイマン一世は父の跡を継ぎ、オスマン帝国第十代スルタンになっていた。世界は丸かった。それをスペインは証明した。しかし、だからといって、スペインに世界支配などさせない。激怒したスレイマン一世は、1529年、スペインの本国である神聖ローマ帝国の首都ウィーンを包囲した。神聖ローマ帝国の皇帝、ハプスブルク家のカール五世を見に行った。

これを第一次ウィーン包囲と呼び、世界を二分割する条約を結んだ神聖ローマ帝国よりも、イスラムのオスマン帝国の方が軍事力で強かったことを意味する。大航海時代のヨーロッパは決して、軍事力で世界最強ではなかった。

スレイマン一世はカール五世に会い、詰問した。

「世界を征服するとは何ごとか！ 貴様の善悪を計りに来たわ」
カール五世は怯えながらも答えていった。

「大地は丸かったのです。それを知れば、人は狂う。我が帝国の進軍も、大地を祝福せんがためです」

スレイマン一世は、それを聞いて、ウィーン包囲を解いて、軍を引いた。

「確かに大地が丸ければ、人は狂う。神聖ローマ帝国は善なり」

こうして、神聖ローマ帝国は無事、滅びることなく残り、五十年後には、太陽の沈まぬ帝国といわれた。

8、ピサロの新大陸征服

1532年、スペインのピサロ率いる160人の兵は、インカ帝国8万人の兵を破り、インカ帝国の皇帝アタワルパを捕らえている。ピサロは実に、400倍の兵に勝ったことになる。

これが歴史的に有名なカハマルカの惨劇であり、銃と鉄器を装備した軍隊は、石器や木器の軍隊より、400倍強いという証明である。

この圧倒的戦闘力の差によって、インディアンは絶滅に等しいほど、殺されてしまう。

二十世紀、アメリカ軍とイラク軍の戦争においても、アメリカ側の死者100人に対し、イラク人は10万人死んでいる。その差は、千倍である。

わたしは、戦争の勝ち負けを決めるのは、戦術、戦略を通り越して、常日頃からの兵装に要因があると思っている。わたしは、自国日本の兵装に対して、意見をネットで叫び、なんとか、日本を守ろうと思っている。侵略する気はいっさいない。

だが、わたしの国が他国に蹂躪されるなど、耐え難い屈辱だ。

歴史上、多くの人々が、信じられない敗北の屈辱を感じたのであろうが、これは、本当に気が狂いそうになるくらいたいへんな精神的重圧である。

ピサロは、400倍の敵を簡単に倒した。

敗戦において、行方策のひとつに、女を差し出し、敵兵の子を生ませるというのがある。非常に屈辱的なことだが、これによって、自分たちの民族は絶滅することなく、敵国と混血できるのである。

南北アメリカ大陸には、まだ多くのインディアンが住んでいるが、純血のインディアンはほとんどいないと聞く。混血したのだ。

それを言い出せば、純血の日本人だって、残っているのか怪しいものだ。中国、韓国の人々と大部分が混血しているのである。

400倍の敵を倒したピサロを世界史上最強の兵と呼ぶべきであろうか。それはわからない。だが、いえることは、世界地図はすでに完成した。知恵と技術の研鑽を怠れば、一人ではどうあがいても勝てないくらいの差ができるのである。

9、黒人奴隷解放

16世紀から18世紀の間に、西アフリカからアメリカ大陸へ連れて行かれた黒人は、一千万人ぐらいたという。当時の世界人口は二億人ほどであるから、人口の5%が貿易によって移動したことになる。

これは、黒人が白人に黒人奴隷を売ったのであり、白人は奴隷のお返しにビーズの玉を贈った。黒人の支配者は白人のもってくるビーズの飾り物が大好きで、白人に売るために次々と黒人を捕まえて奴隷にしていた。

あるところに、ブートンという黒人がいた。ブートンは、いった。「あの肌の白い連中は、大勢の奴隷を買っていくが、いったい、あの白人の連中は何を考えているんだ」

それを聞いて、白人の奴隷商人は答えた。

「ジャン・ジャック・ルソーの本を読んでいるんだ。人は生まれながらに自由であり、権利において平等であるというようなことが書いてあるんだ。我々商人は、王様に対抗するためにも、こういう思想を学ばなければならぬんだ」

「ほう、面白いことをいう。ブートンの村では、王様と奴隷の権利は同じじゃない。もし、おまえたちの国の人々が同じ権利をもって生きているなら、ブートンもおまえたちの国へ行く」

「なら、船に乗れば連れて行ってやるぞ」

そして、ブートンはアメリカへ行った。足に鎖をつながれて、思うように動けない。毎日、砂糖畑で働くようにいわれて、ブートンは不満だった。

「何かがおかしい。なあ、何かがおかしいぞ」

「ブートン、今日はセックスしないのか。子どもをたくさんつくらないと、支配人に怒られるぞ」

「ブートン、セックスする。でも、なぜ、支配者とブートンの権利

は同じじゃないのか」

「さあ、おれは何も知らないからなあ」

「ブートンはいろいろ知っている。今日は、西暦1863年1月1日、奴隷解放宣言をリンカーン大統領が発布した日。たぶん、明日から、ブートンたちの仕事、なくなる」

「仕事なくなったら、どうするんだ？　仕事はない方がいいが、お金がないぜ」

「ブートンには、未来が見える。ブートンたち、黒人、これからもずっとずっと貧しい暮らしをすることになる。白人に蔑まれ、いじめられる。でも、百五十年後には、差別なくなる。そしたら、黒人にも、幸せやってくる。未来はきつときつとよくなる。ブートン、そのために働く」

「でも、白人のやつらは、最初から莫大な財産を持ってるんだぜ。不公平じゃないか」

「ブートンは我慢する。それは、白人が四百年間も、賢く商売をして、お金を貯めたから。それに追いつくには、四百年分がんばらなとダメ。ブートンは、人より四百倍がんばれるから、ブートンが一年がんばれば、たぶん、大丈夫」

そして、ブートンはアメリカの一市民として暮らしている。

10、失敗した理想郷ソビエト連邦

1848年、マルクスとエンゲルスは、共産党宣言を発表した。万民の平等を求め、資産家の資産を否定し、すべての人が財産を共有しようという思想である。その背景には、拡大する資産家と貧困層の格差が存在した。

その思想は、人々に素晴らしい思想だと真剣に受け止められ、1917年、ロシアに革命が起こり、世界初の社会主義国家ソビエト連邦が成立した。指導者はレーニンである。

ソビエト連邦は、共産党一党独裁であり、共産主義による世界同時革命を目指した政府だった。周辺諸国を次々と併吞し、共産主義の波はロシアの冷たい大地から迫り狂った。

ソビエト連邦の組織を考え出したのも、真面目堅物の理想家たちだった。世界中の資産家は、自分の資産がソビエトに奪われるのを恐れた。

ソビエトに対抗した勢力は、自由と移民の国アメリカだった。かつては、イギリスの植民地にすぎなかったアメリカは、経済的に大成長をとげ、世界最大の超大国となっていた。それを支配するのは、民主主義の精鋭と資産家である。

ソビエトとアメリカは、世界を二分して戦い、当時の最先端技術を競った。先に核兵器を開発したのはアメリカだが、ソビエトもすぐに核実験に成功し、二つの国は、地球を焼き尽くすほどの核兵器をもった。この二つの国が戦えば、人類は滅ぶ。核戦争が始まれば、世界は滅ぶ。

世界の終わりを感じつつあった世界中の人々は、二つの国の戦う局地戦を、慎重な目で眺めていた。

二つの国は、技術を競い合い、宇宙にまで行った。宇宙技術の進んでいたのはソビエトであり、先に人工衛星を打ち上げ、人類初の宇宙飛行を成し遂げた。世界中の人々が熱狂した。世界初の宇宙飛

行士ガガーリンを抱きしめたいという人々でいっぱいだった。

戦えば、世界が減ぶという時代になり、強い者などいなくなった。強いやつは本当に強いんじゃない。ただ、核兵器で殺されないように見逃されているだけだ。核兵器により、強さの時代は終わった。

この二国間のにらみ合いは、74年で終わった。1989年、東ドイツのベルリンの壁が壊され、共産国家だった民衆は、資本主義の国へ逃げた。資本主義の国のが桁違いに豊かだったからである。1991年、ソビエト連邦も解体した。

頭で描いた理想郷は、またしても空想の産物として終わってしまった。万民が資産を共有するはずのソビエト連邦において、やはり個人資産というものはあり、盗みもあった。高級官僚は、平民より数倍豊かな暮らしをしていた。理想郷であるはずのソビエト連邦において、人々は、競い合って働くことがなかった。労働者はやる気をなくし、怠惰な労働がソビエト連邦を貧しくさせていた。

戦えば、世界が減ぶと、緊張していたアメリカ政府は、滅びたソビエト連邦を見て拍子抜けした。なんと、もろかったのだろうか。ここに、世界を二分する冷戦は終結した。冷戦に勝利したアメリカの動きを世界中が見ていた。アメリカは、人々の期待を裏切り、世界警察国家構想を持ち出し、世界征服にのりだした。まことに許しがたいことであった。

アメリカの世界征服は必ず阻む。しかし、ヨーロッパで国境線がなくす実験、ユーロが行われた。それが成功していれば、平和的に世界は統一されたかもしれない。だが、どうやら、ユーロも失敗に終わりそうだ。

理想郷の実現への道は遠く、貧富の差は激しく、人類の未来にはまだ課題が山積みである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8580t/>

おりが選んだ十章からなる世界史

2011年6月5日22時11分発行